



年間第 12 主日 (マタイ 10:26-33)

譲れないものを、恐れずに言い広める

復活節の一連の祝祭日が終わって、年間の主日に移行しました。年間第 12 主日は恐れを持つ必要のある相手はこの世にはなく、むしろ神のみを恐れるべきであると招きます。わたしたちの心の持ち方をうながす大切な招きだと思えます。

この前、書留で印象深いミサ依頼を受け取りました。たいていのミサ依頼は、家族の為先祖の為だと思えます。そのミサには、家族と思われる方の名前と、さらに洗礼を授けてくれた神父さま、洗礼に立ち会ってくれた代父母の為に書かれています。

いずれ報告をするのでどなたが頼んだかは公表されますが、耳を傾けてほしいのは、誰が頼んだかではなく、どんな人のために頼んだかに耳を傾けてほしいのです。

自分と関わりのある人のためにミサをお願いする。よく見かけるごミサです。けれどもその人が洗礼を受けた時に関わった神父さま、立ち会ってくれた代父母にも思いを向ける気配りは、中田神父もちよっと思ひ浮かびませんでした。たしかに関わってくれた司祭や代父母がいます。わたしも洗礼を授けてくれた神父さまがいますし、代父がいます。わたしが 51 歳になるまで、洗礼を授けてくれた神父さまも代父のおじさんも健在です。本当にありがたいことだと思えます。

ではこれら洗礼に関わってくださった方々のためにわたしはどんな感謝をしてきたでしょうか。わたしが司祭になったことでいくらかの感謝はお返しできたかもしれませんが、十分ではないような気がします。今回依頼を受けたミサの内容を見て、もっと考えていいことだなあと思えました。そのまま真似をしないとしても、何か続けて感謝の思いを伝えなければと思ったのです。

福音朗読を読み返してみましよう。朗読の後半に、次のようにあります。「だから、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言ひ表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言ひ表す。しかし、人々の前でわたしを知らないと言ひ表す者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言ひ表す。」(10・32-33)

ミサを頼んでくださる方すべてに当てはまると思えますが、ミサをお願いするという事は、人々の前で「イエス・キリストの仲間です」と言ひ表している人たちです。それに加えて、自分がお願いする人に関わった人たちのことも忘れない。こういう姿勢は、イエスの福音を消化して、自分のものにして生きているのではないのでしょうか。

「自分はイエス・キリストの仲間です」「この人は、イエス・キリストの仲間です」こう言ひ切ることでできる人は、他の人間関係はともかく、イエス・キリストとの関係は変わったりしない、変えたりしない。そう確信している人だと思えます。それは、朗読の前半で言ひ表されていることにつながります。「人々を恐れてはならない。」(10・26)

人間関係が良好だった人と、信仰を危険にさらす場面で対立し、難しい判断ののちに離れていくことが時として生じます。ほかのことは譲ったとしても、信仰の点では譲れない。その、どうしても変えられない部分で何かを強要されると、ある人は何事もなかったかのように手のひらを返します。しかしどうしても譲れないので、ある人は強要する人のもとを去っていきます。

たとえばそれは、結婚のためにカトリックの信仰を捨ててくれということかもしれません。いのちを宿したとき、いのちを初めから守ると教えられたカトリックの信仰、生涯にわたって愛と忠実を尽くしますと、結婚の時に誓うカトリックの信仰。この生き方を捨てて、わたしと一緒に歩いてくれと言われても、わたしたちは譲れないのです。

譲れないものを守るために、離れ去ると、どんな仕返しがあるだろうか心配になったり、立場を失うのではないかと思うかもしれません。イエスはそこで励ましの言葉をかけておられるのです。「人々を恐れてはならない。」しかもどんな危険も、神のために譲れないものは譲れないと心に決めたなら、神はあなたを守ってくださるのです。

スコセッシ監督が制作した「沈黙」を思い出してください。映画の中で、ロドリゴは最後に死んで葬られていきました。恐ろしい拷問の末に彼は転んでしまったのですが、火葬のために送り出される時、小さな十字架を奥さんが手に持たせてくれて、その姿で火葬されました。

譲れないものがたくさんあって、それが一つずつ引きはがされ、最後には司祭としての姿も引きはがされました。それでも、最後に一つ、譲れないものを手の中に納めて、旅立っていきました。まるで、「最後に譲れないものは、イエス・キリストへの信仰、その一つだけである」と言っているかのようです。

イエス・キリストへの信仰のために譲れないものがある。その生き方は恐れる必要のない者を恐れず、恐れるべき者を恐れて生きる生き方です。わたしたちはどうかすると自分の努力で何でもできると思っているのか、祈りをしなくても一日無事に生きていると勘違いしていますし、寝ている間に心臓が止まらなかったのもさも当たり前であるかのように思っています。恐れるべき者を恐れずに生きているのです。

恐れるべきものを恐れて生きるとは、びくびくして生きるということではありません。むしろ恐れずに生きる生き方です。わたしたちはイエス・キリストへの信仰に筋が通っていれば、何も恐れるものはないのです。「自分はイエス・キリストの仲間です」ときっぱり言える生き方、これを曲げたりおろそかにしないなら、何を失っても、誰を失っても、譲れないのです。

生涯、「イエス・キリストはわたしの仲間です」と言い続ける。わたしの守るべきものが、引きはがされるかもしれません。それでもわたしたちが譲れないものは、恐れずに言い広めることにしましょう。